

日本国際文化学会

<http://www.jsics.org>

ニューズレター

2011年11月10日 発行
日本国際文化学会事務局
〒253-8550
神奈川県茅ヶ崎市行谷1100
文教大学国際学部山脇千賀子研究室

2012 全国大会開催、国際文化会館との共催で

2012年7月7日（土）、8日（日）の両日、第11回全国大会が60年にわたる国際文化交流と知的協力の実績を持つ財団法人国際文化会館との共催のもとで国際文化会館（アイハウス）と青山学院大学において開催されます。大会実行委員長は青山学院大学総合文化政策学部・岡眞理子教授です。共通論題・自由論題発表者を下記の要領で募集しますので、それぞれの期日までに電子メールにてご応募いただけますようお願い申し上げます。会員諸氏の活発なご参加をお待ちしております。

日本国際文化学会会長 若林 一平

日本国際文化学会 2012 年度第 11 回全国大会（会場：国際文化会館・青山学院大学）

主催：日本国際文化学会 共催：財団法人国際文化会館
期日・会場：2012年7月7日（土）国際文化会館（アイハウス）
2012年7月8日（日）青山学院大学 総研ビル

会場 住所：財団法人国際文化会館（アイハウス）
〒106-0032 東京都港区六本木5-11-16 TEL 03-3470-4611
青山学院大学 総研ビル
〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 TEL 03-3409-6304（総合文化政策学部合同研究室）

大会実行委員会：青山学院大学総合文化政策学部 岡眞理子研究室
電子メール jsics2012@yahoo.co.jp

参加費：一般会員 2,000 円 / 学生会員 1,000 円

プログラム：自由論題・共通論題・フォーラム・懇親会・公開シンポジウムを予定

《自由論題・共通論題発表者募集》

第11回全国大会開催にあたり、共通論題と自由論題を募集します。採否は締め切り後1ヵ月以内にご連絡します。
〈共通論題〉

企画された特定のテーマに関して、司会1名に加えて3~4名のパネリストもしくは報告者による報告と討論で構成する。時間は原則2時間とする。

申し込みは、司会者、報告者の候補者を含め、企画名（テーマ）・申し込み代表者氏名・現職・連絡先をA4で1枚にまとめた企画内容の説明を電子メールでご提出ください。

*宛先：第11回大会実行委員会宛（プログラム担当：成蹊大学文学部・川村陶子）

電子メール jsics2012@yahoo.co.jp

応募締切：2011年12月31日必着

〈自由論題〉

個人研究発表とする（内容により、複数の発表者による発表も可とするが、その場合も1名分の時間とする）。時間は質疑応答も含めて30分とする。氏名・現職（大学教員・有識者の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記）・連絡先・発表題目・キーワード（3~5語）を冒頭に記し、発表要旨（40字×25行以内）を付けて、電子メールでお送りください。なお、申し込み時に提出していただく発表要旨が、そのまま大会時に配布される要旨集に掲載されます。

*宛先：第11回大会実行委員会宛（プログラム担当：成蹊大学文学部・川村陶子）

電子メール jsics2012@yahoo.co.jp

応募締切：2012年3月31日必着

【応募資格】共通論題申し込み代表者・自由論題発表者は日本国際文化学会の会員に限る。ただし、現在会員でない方は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得ることとします（入会の申し込みは学会事務局へ）。

国際文化会館と国際文化学会-共催実現にあたって-

平野 健一郎

编者注：国際文化会館との全国大会共催実現にあたり新渡戸国際塾の塾頭で当会創立会長の平野健一郎先生に寄稿していただきました

日本国際文化学会が今度のはじめて国際文化会館に正式に出会うことになった。すなわち、国際文化学会の2012年度全国大会は国際文化会館との共催で開催され大会の一部を国際文化会館で催させていただけるのである。実は、学会は2011年度の大会を去る7月に国際文化会館で開かせていただくはずであった。ところが、3月11日の東日本大震災と福島第一原発事故が発生し、急遽、若林会長の英断で会場を沖縄名護市の名桜大学に変更したのであった。一年後に、当初の希望が実現するわけである（なお、2012年度大会の本会場は青山学院大学）。

国際文化会館（International House of Japan）と国際文化学会（Japan Society for Intercultural Studies）、名称の「国際文化」という4文字は共通であるが、これまで組織間のご縁はまったくなかった。世の中にはるかによく知られているのは国際文化会館で、それは、会館が1952年に創設されて以来、日本の内と外に知的交流、人的交流、国際交流を積み上げる努力をたゆまず続けて来られたからである。他方、国際文化学会が設立されたのは2001年で、「国際文化」の世界には新参であるが、会館が学会を作ったというような関係ではまったくなく、20世紀最後の10年に全国の国公立大学に新設された国際文化学部、国際文化研究科などの教員が集まって作った学会である。

両者は共に「国際文化」に関わる組織・団体であるが、東京港区六本木の会館に行けば、そこに国際文化があるというわけではないし、国際文化学会が「国際文化」という確固としたものを研究しているわけではない。会館に行くと、美しい日本庭園があり、世界各地から集まってくる人々と、国際的な関心を持つ日本人たちが交流する場があるだけである。学会は、国際文化とは何か、そもそも国際文化などというものがありうるのか、というような議論を重ねている研究者の集団である。何か捉えどころのないもの、何か望ましいものを追い求めている人々の集まり、という点が両者の共通点かもしれない。日本の国内に視点や関心をとどめずに、日本の外や国境を越える範囲に関心を及ぼすのも共通点であろう。

「ヨコメシを食う」という表現がある。外国人と外国語で会話をしながら食事をするという、時に苦痛を伴う行為を表している。筆者にとって、会館での初体験はまさにそういうものであった。ハイ・ソサエティ、ハイブラウの会館というイメージはそこに起因するのである。日本文化とは異なる文化を持つ人々に会って、意見を交換する場としての会館がその役目を果たしてきたのは、創設者松本重治の「国際交流は人に始まり、人に終る」という信念が生かされてきたからである。戦後日本の復興には国際的な知の交流が有効とされたことから、主として欧米から会館に招かれた「人」には「知の巨人」が多かった。会館は、戦後

日本の知識人が耳を傾けるべき欧米先進の「知」の紹介者であった。外国から会館を訪れる人々は、会館の簡素な設備と日本庭園の美しさを愛し、京都などを案内されて、日本好きになることが多かったが、基本的には、双方向の国際交流にはならなかった。

ところで、国際文化会館の英語名の「国際」に相当する部分は「インターナショナル」である。それに対して、学会の英語名のその部分は「インターカルチュラル」である。この違いは重大であり、意味深長である。会館の関心事は「国民間の」関係であるのに対して、学会のテーマは、日本語では「国際文化」と表現され、「国際」という単語が用いられているが、英語名がよりの確に表現しているように、「文化間の」関係である。同じ「国際」を冠しているが、関係を構成する単位が国民と文化と、異なっているのである。会館は、ある時期から交流の相手を欧米以外の、アジアなどに広げ、また、双方向の交流にする努力を払うようになって、今日に至っている。しかし、国際交流の単位を国民に定めている点は今日でも変わっていないように思われる。その意味で、会館は20世紀後半という時代の申し子である。

国際文化学会は、「インターカルチュラルな」関係を追究することを掲げることによって、グローバル時代、多文化時代である21世紀の学会となることを目指している。国民を唯一の基本単位とする思考を超えて、一つの国内にも多層にわたって文化が存在すると考え、重層的な文化の関係を考察することを課題に掲げている。国民とその文化を固定的に捉えるのではなく、また、国民と国民のヨコの関係だけを考察するのでもなく、国民の下の地方と、国民と、国民の上の地域というように、文化の単位を多層的に設定して、それらの間のタテの重層的な関係をも解明しようとするのが国際文化学である、という立場である。

しかし、会館と学会の最大の違いは、会館は実践機関であり、学会は研究組織である、という点である。会館は、創設者のもう一つの念願を受け継いで、中国をはじめとするアジア諸国との交流にも力を尽くしてきた。また、一方通行ではなく、双方向の国際交流を実現するために、さまざまな試みを重ねてきた。さらに最近では、戦後60余年を経て世代交代が進み、高齢化も進んできたことに鑑みて、次世代、次々世代を国際交流に誘う「新渡戸国際塾」のような、ターゲットを広げる新しい工夫も行なっている。会館が国際的な相互理解の増進のために積極果敢に挑戦していく姿に、学会は研究面で学ぶところが多いように思われる。特に、学会は会館の歴史と経験と実践を研究の重要な対象とし、「国際文化学」の実証と理論化に活かすべきであらうし、逆に、「文化間関係」（インターカルチュラルリティ）とは何か、その理解を構築して、実践の進化に寄与すべきであらう。今回の出会いを機に、国際文化会館と国際文化学会がタイアップを進め、「国際文化」の実践と研究をステップアップすることを期待したい。

【報告】2011年度秋季大会

奥田 孝晴 (大会実行委員長・文教大学)

10月3日(日)、秋風が漂い、キンモクセイの香りがほのかに香る中、JSICS 秋季大会が文教大学湘南キャンパスにて行われました。本会は当初7月に予定されていた全国大会が東日本大震災・福島原発事故を受けて急遽、名桜大学(沖縄県名護市)にて移転開催されたのを受け、追加的に実施されたものです。

当日は自由論題発表(3セッション、9報告)および共通論題発表のほか、特別企画ワークショップ&ランチの企画を設け、アカデミックな緊張感の中にも和気藹々としたプログラムが展開されました。

午前中に行われた自由論題発表では会員皆さんからの研究成果の発表とそれに基づく質疑・意見交換が活発に繰り広げられました。諸発表からは文明・文化の重層性およびその混在や融合とそれを一つの要因とする諸課題に対する様々なアプローチが紹介され、知的啓発の機会として有益な時間を持つてました。また午後の共通論題発表「草原の文化—グローバル化の源流を求めて」は、「情報」と「ネットワーク」という文化素因を最大限に活用し世界帝国を出現させ、さらにその統治における文化的多様性の保障と共生への志向を最初に具象化した事例としてのモンゴル帝国を祖上に乗せ、草原文化の源流から今日のグローバル化のあり方を批判的に考察するという、ユニークな知的挑戦の機会となりました。

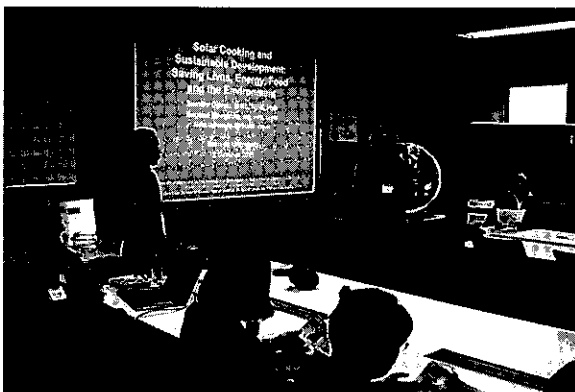
また特別企画として、小川寿美子会員(名桜大学)、Eugen Boostrom氏(名桜大学)を中心としたソーラーッキングの実演指導が行われました。あいにくの天候(曇りで日光が得られない!)でしたので当初予定していた屋外実演は行わず、器具の利用法解説を主としたガイダンス企画でしたが、太陽光・太陽熱を利用した調理器具活用はッキングに留まらず、雑菌処

理による食物の保存や安全な飲料水の確保など、とりわけ第三世界の生活文化向上に大きな役割を果たせるのではないかと期待を持たせてくれるものでした。また、エネルギーの地産地消とも言うべき「分権的・自主的エネルギー」に基づいた文化の創造可能性は、今日私たちが直面している困難としての「フクシマ」に表象される「集権的・依存的エネルギー」文化への有力なアンチテーゼとしても、非常に重要な意味を持っているのではないかと考えられます。

ランチタイムには茅ヶ崎市長らをコメンテーターにお招きし、地元農園(伊右衛門農園さん)から提供していただいたニンジン混ざりチョコレートケーキ、横川潤会員(文教大学)とゼミ生、地元の仕出し弁当屋(濱田屋さん)がタイアップし、オリジナルに開発した「茅ヶ崎文教弁当」についての報告をしていただきました。道畑美希会員(東洋大学)の実践報告と共に、地産地消型文化創造の一つの試みとして高い評価を受けた企画ではなかったか、と自負する次第です。これらはいわば実践型・実演型の報告という性格を持ったものですが、今後の研究集会・大会のあり方に対して一つのオプションを広げる試みでもあります。拙い運営ではありましたが、今後の本学会の発展にわずかながらでも貢献出来たとすれば、まことに幸いです。

なお、本大会実施に際しましては若林一平会長(文教大学)はじめ会員皆様からの大きなご尽力とご協力をたまわりました。とりわけ先の全国大会の移転開催を快諾していただきました名桜大学の皆様に、心より感謝申し上げます。また、内輪的なことながら、運営準備・実施に協力してくれた文教大学の学生諸君にも紙面をお借りして謝意を表したく思います。

また次回、お会いいたしましょう。



特別企画ワークショップ&ランチ:横川会員による導入



共通論題「草原の文化」登壇者たち

会員名簿発刊にあたってアンケートのお願い

当学会は会員の専攻、関心領域が多方面に渡っており、会員間のコミュニケーションをはかる上で、それらの点に関する情報が欲しいとの観点から、2006年3月に会員名簿が発行されました。

それから5年がたって、会員の入退会や連絡・所属先が変更になる等の修正が生じておりますので、2012年3月の最新版会員名簿発行をめざして、「名簿に関するアンケート」を行いたいと思います。

つきましては、別紙のとおり、名簿へ掲載する項目に関する諾否、専攻、国際文化学との関係領域についての情報掲載の諾否と、掲載可の場合の内容について調査項目にご記入の上、同封の返信はがきの返送をお願いいたします。

尚、回答を期限までに提出されない方については、現在登録されているデータをそのまま利用させていただきますので、ご了承願います。

本名簿の掲載項目は以下のようになっています。

- ① 氏名②ふりがな③連絡先④機関名。所属、肩書き⑤住所⑥専攻・国際文化学との関係領域⑦メールアドレス⑧電話番号⑨FAX番号

提出期限： 2011年12月31日必着

会費未納入の方へ会費納入のお願い

2011年度の会費をまだ納入されていない会員の方は、会費納入をお願いします。未納の方には払込用紙を同封しますので、以下の口座にお振込みください。なお、2009年度以降の未払い金額をお知らせしますので、併せて納入ください。

年会費は、一般会員 10,000 円、大学院生 5,000 円、学部学生 2,000 円です。

郵便振込口座： 00270 7 98194 日本国際文化学会

※郵便払込取扱票の備考欄に、何年度分会費かご明記ください。

◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇

秋季研究大会は文教大学の皆様のホスピタリティに支えられ、大変充実したひとときとなりました。今号ではそのご報告と、来るべき第11回研究大会のご案内をお届けします。10年というひとつのサイクルを終え、新しい一歩を踏み出す大会に、積極的なご参加をお待ちします。

お忙しい中ご寄稿下さった執筆者の皆様、編集発行の作業を全面的にサポートして下さいました学会事務局の皆様に、心より感謝申し上げます。

ニューズレター編集責任者： 成蹊大学文学部国際文化学科 川村陶子